

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む 授業の在り方に関する研究（1年次）

－「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通して－
【2年研究】

中学校・高等学校 国語科

【研究の概要】

次期学習指導要領では、「何を学ぶか」という指導内容の見直しにとどまらず、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」までを見据えて改訂される。本研究は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善と学習評価の改善に取り組み、資質・能力の「三つの柱」の育成につなげる授業の在り方について提案するものである。

キーワード：資質・能力を育む学習過程、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習活動「見方・考え方」の構造

《研究協力校》
奥州市立水沢南中学校
県立岩泉高等学校

平成 29 年 3 月
岩手県立総合教育センター
教科領域教育担当
早 川 貴 之
横 田 昌 之

目次

I	研究主題	1
II	研究主題設定の理由	1
III	研究の目的	1
IV	研究の目標	1
V	研究の見通し	2
VI	研究構想	2
1	研究に対する基本的な考え方	2
(1)	現行学習指導要領における国語科の成果と課題について	2
(2)	国語科において育成を目指す資質・能力について	2
(3)	国語科における「学習対象」と「見方・考え方」について	4
(4)	「主体的・対話的で深い学び」の実現について	4
(5)	学習評価の在り方について	5
2	実践に向けて	6
(1)	国語科における資質・能力を育成する学習過程について	6
(2)	単元構想について	8
(3)	学習評価について	11
3	研究構想図	12
VII	理論構築のための授業実践	13
1	中学校における授業実践	13
(1)	授業実践の内容	13
(2)	授業実践後の捉え	20
(3)	理論実現のための留意点	22
2	高等学校における授業実践	24
(1)	授業実践の内容	24
(2)	授業実践後の捉え	31
(3)	理論実現のための留意点	33
VIII	研究のまとめ	35
1	成果	35
(1)	「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点から の授業改善について	35
(2)	学習評価の充実について	35
2	課題	36
(1)	「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点から の授業改善について	36
(2)	学習評価の充実について	36
3	来年度に向けて	36
	〈おわりに〉	36
IX	引用文献および参考文献	36

I 研究主題

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方に関する研究 【2年研究】

－「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通して－

II 研究主題設定の理由

平成 27 年 8 月、中央教育審議会教育課程企画特別部会は、次期学習指導要領の基本的方針について「論点整理」(2015)にまとめた。その後、平成 28 年 8 月には「論点整理」を踏まえ「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(以下「審議のまとめ」という)」(2016)が取りまとめられ、同 12 月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(以下「答申」という)」(2016)が出された。それらの中で、グローバル化による社会の多様性や急速な情報化、技術革新による人間生活の質的な変化の影響により、子供たちの成長を支える教育の在り方も新たな事態に直面していると指摘している。

これからの社会を創り出していく子供たちに求められる資質・能力とは何かを、学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から、育成を目指す資質・能力を以下の三つの柱(以下「三つの柱」という)で整理している。

- ① 「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」
- ② 「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」
- ③ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養)」

これら「三つの柱」をバランスよく育むためには、『何を学ぶのか』という指導内容等の見直しとともに、それらを『どのように学ぶのか』という子供たちの具体的な学びの姿について「主体的・対話的で深い学び」の実現の視点からの見直しが欠かせないものとしている。

こうした流れを受け、本研究では、「三つの柱」を総合的に育むことを目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現の視点からの授業改善に取り組んでいく。その際、指導法を一定の型にはめ、狭い意味での授業方法や授業技術の改善に終始しないようにすることに留意していく。また、授業をより充実したものにしていくために、「生徒たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉える学習評価についても取り組んでいく。あわせて、学習評価の内容を学習・指導方法の改善につなげていくカリキュラム・マネジメントの考え方についても検討していく。

III 研究の目的

次期学習指導要領が目指す資質・能力の「三つの柱」を総合的に育むため、中学校、高等学校の教員に「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善と生徒の学習の成果を的確に捉える学習評価の改善を促す。

IV 研究の目標

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育むため、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善の在り方と生徒たちの学習の成果を捉える学習評価の在り方について研究し、研究内容をガイドブックにまとめ、授業実践により、その有効性を明らかにする。対象校種・教科は、中学校及び高等学校の国語科、数学科、理科、社会科、地理歴史科、公民

科，外国語（英語）科とする。

V 研究の見通し

中学校及び高等学校の国語科，数学科，理科，社会科，地理歴史科，公民科，外国語（英語）科における授業において，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善，及び生徒の学習の成果を適切に捉える学習評価の改善を行うことによって，資質・能力の「三つの柱」が生徒にバランスよく育成されることを目指す。

1年次は研究理論の構築をし，2年次は研究理論に基づいた授業実践からの検証を行う。

VI 研究構想

1 研究に対する基本的な考え方

(1) 現行学習指導要領における国語科の成果と課題について

ア 成果

- 「PISA2012（平成24年度実施）においては，読解力の平均得点が比較可能な調査回以降，最も高くなっているなどの成果が見られた」（「答申」（2016）P.124）
- 「全国学力・学習状況調査において，各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けた学校の割合は，小学校，中学校ともに90%程度となっており，言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている」（「答申」（2016）P.124）

イ 小学校の課題

- 「全国学力・学習状況調査等の結果によると，小学校では，文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること，目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題がある」（「答申」（2016）P.124）

ウ 中学校の課題

- 「中学校では，伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや，複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること，文章を読んで根拠の明確さや論理の展開，表現の仕方等について評価することなどに課題がある」（「答申」（2016）P.124）

エ 高等学校の課題

- 「高等学校では，教材への依存度が高く，主体的な言語活動が軽視され，依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり，授業改善に取り組む必要がある。また，文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること，多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること，国語の語彙の構造や特徴を理解すること，古典に対する学習意欲などが課題となっている」（「答申」（2016）P.124）

オ 次期学習指導要領において

- 「今回の学習指導要領の改訂においては，これまでの成果を踏まえるとともに，これらの課題に適切に対応できるよう改善を図ることが求められる。その際，思考力・判断力・表現力等の育成を効果的に図るため，引き続き，記録，要約，説明，論述，討論等の言語活動の充実を図ることが必要である」（「答申」（2016）P.125）

(2) 国語科において育成を目指す資質・能力について

「答申」（2016）では，国語科において育成を目指す資質・能力を，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理を行い，【表1】のとおり取りまとめたものを示している。

ア 「知識・技能」について

「『言葉の働きや役割に関する理解』は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上させる上で重要な要素である」（「答申」（2016）P.125）

イ 「思考力・判断力・表現力等」について

「これからの子供たちには、創造的・論理的思考を高めるために、『思考力・判断力・表現力等』の『情報を多面的・多角的に精査し構造化する力』がこれまで以上に必要とされるとともに、自分の感情をコントロールすることにつながる『感情や想像を言葉にする力』や、他者との協働につながる『言葉を通じて伝え合う力』など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要である。」（「答申」（2016）P.125）

【表1】国語科において育成を目指す資質・能力の整理（「答申 別添資料」（2016）P.2 より）

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力，人間性等
<p>○言葉の働きや役割に関する理解</p> <p>○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> 書き言葉（文字），話し言葉，言葉の位相（方言，敬語等） 語，語句，語彙 文の成分，文の構成 文章の構成（文と文の関係，段落，段落と文章の関係）など <p>○言葉の使い方に関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し方，書き方，表現の工夫 聞き方，読み方，音読・朗読の仕方 話合いの仕方 <p>○書写に関する知識・技能</p> <p>○伝統的な言語文化に関する理解</p> <p>○文章の種類に関する理解</p> <p>○情報活用に関する知識・理解</p>	<p>国語で理解したり表現したりするための力</p> <p>【創造的・論理的思考の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 情報を多面的・多角的に精査し，構造化する力 推論及び既有知識・経験による内容の補足，精緻化 論理（情報と情報の関連性：共通－相違，原因－結果，具体－抽象等）の吟味・構築 妥当性，信頼性等の吟味 ▶ 構成・表現形式を評価する力 <p>【感性・情緒の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 言葉によって感じたり想像したりする力，感情や想像を言葉にする力 ▶ 構成・表現形式を評価する力 <p>【他者とのコミュニケーションの側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 言葉を通じて伝え合う力 相手との関係や目的，場面，文脈，状況等の理解 自分の意思や主張の伝達 相手の心の想像，意図や感情の読み取り ▶ 構成・表現形式を評価する力 <p>《考えの形成・深化》</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 考えを形成し深める力（個人または集団として） 情報を編集・操作する力 新しい情報を，既にもっている知識や経験，感情に統合し構造化する力 新しい問いや仮説を立てるなど既にもっている考えの構造を転換する力 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉がもつ曖昧性や，表現による受け取り方の違いを認識した上で，言葉がもつ力を信頼し，言葉によって困難を克服し，言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 言葉を通じて，自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに，考えを伝え合うことで，集団としての考えを発展・深化させようとする態度 様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに，それらの言葉を互いに交流させることを通して，心を豊かにしようとする態度 言葉を通じて積極的に人や社会と関わり，自己を表現し，他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め，尊重しようとする態度 我が国の言語文化を享受し，生活や社会の中で活用し，継承・発展させようとする態度 自ら進んで読書をし，本の世界を想像したり味わったりするとともに，読書を通して，様々な世界に触れ，これを擬似的に体験したり知識を獲得したり新しい考えに出会ったりするなどして，人生を豊かにしようとする態度

(3) 国語科における「学習対象」と「見方・考え方」について

「答申」(2016)には、各教科の特質に応じた「見方・考え方」が示されている。「見方・考え方」は、将来にわたって使い続ける「道具」のようなものであると考えられる。だからこそ、子供たちが十分に使いこなすことができるようにしていかなければならないと考えている。

国語科における「見方・考え方」については、「答申」(2016)で次のように述べられている。

- 国語科は、様々な事物、経験、思い、考え等をどのように言葉で理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している。それは、様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするものではないことを意味している。
- 事物、経験、思い、考え等を言葉で理解したり表現したりする際には、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、創造的・論理的思考、感性・情緒、他者とのコミュニケーションの側面から、言葉の意味、働き、使い方等に注目してとらえ、その関係性を問い直して意味付けるといったことが行われており、そのことを通して、自分の思いや考えを形成し深めることが、国語科における重要な学びであると考えられる。
- このため、自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることを、「言葉による見方・考え方」とする。(「答申」(2016) P.126)

(4) 「主体的・対話的で深い学び」の実現について

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、「これをすればいい」というものではなく、資質・能力の三つの柱を総合的に育むために、よりよい授業を追究し続けることであろうと考えている。

ア 「主体的・対話的で深い学び」の視点

「主体的・対話的で深い学び」の視点については、「答申」(2016)で次のように整理されている。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。(「答申」(2016) PP.49-50)

イ 三つの視点の位置付け

「三つの視点は、子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものでもあるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要である」(「答申」(2016) P.50)

ウ これまでの学習とのつながり

「今までの授業時間とは別に新たに時間を確保しなければならないというのではなく、現在既に行われている言語活動を、「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善し、単元の中で指導内容を関連付けつつ、質を高めていく工夫が求められている」(「答申」(2016) P.51)

エ 単元等のまとまりを見通した学びの実現

「『主体的・対話的で深い学び』は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元の中で、例えば主体的に学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる。」（「答申」(2016) P. 52)

オ 国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現

(ア) 国語教育の改善・充実

「国語教育の改善・充実を図るためには、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて、後述するアクティブ・ラーニングの三つの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。このため、国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とは、アクティブ・ラーニングの視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると言える。」（「答申」(2016) P. 130)

(イ) 「主体的な学び」の視点

「『主体的な学び』の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。」（「答申」(2016) P. 130)

(ウ) 「対話的な学び」の視点

「『対話的な学び』の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設けることなどが考えられる。」（「答申」(2016) P. 130)

(エ) 「深い学び」の視点

「『深い学び』の実現に向けて、『言葉に対する見方・考え方』を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。」（「答申」(2016) P. 131)

(5) 学習評価の在り方について

資質・能力を効果的に育成するために、学習評価は重要であると考えている。

ア 学習評価の意義

「学習評価は、学校における教育活動に関し、子供たちの学習状況を評価するものである。『子供たちにどういった力が身に付いたか』という学習成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図ると

ともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性をもった形で改善を進めることが求められる。」（「答申」（2016）P.60）

イ 評価の観点

「観点別評価については、目標に準拠した評価の実質化や、教科・校種を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、小・中・高等学校の各教科を通じて、『知識・技能』『思考・判断・表現』『主体的に学習に取り組む態度』の3観点到整理することとし、指導要録の様式を改善することが必要である。」（「答申」（2016）P.61）

ウ 評価場面

「これらの観点については、毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導方法と評価の場面を適切に組み立てていくことが重要である。」（「答申」（2016）PP.61-62）

エ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「評価の観点のうち『主体的に学習に取り組む態度』については、学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではない。子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」（「答申」（2016）P.62）

オ パフォーマンス評価

「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。」（「答申」（2016）P.63）

カ 自己評価

「子供一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることが重要である。そのため、子供たちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当である。」（「答申」（2016）P.63）

キ 学校間の差

「観点別学習状況の評価については、小・中学校と高等学校とでは取組に差があり、高等学校では、知識量のみを問うペーパーテストの結果や特定の活動の結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかと懸念も示されているところである。」（「答申」（2016）P.63）

2 実践に向けて

(1) 国語科における資質・能力を育成する学習過程について

【表1】にある資質・能力を育成していくためには、学習過程の果たす役割が極めて重要である。「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を一体として捉え、「活動あって学びなし」になることを避けなければならない。言葉による「見方・考え方」と「学びに向かう力、人間性等」を土台としての、学習活動の段階や学習内容における「アクティブ・ラーニング」の3つの視点の位置付け（主に）、学習活動内で働かせる、資質・能力（主に）について整理し、本研究の基本となる学習過程例（読むこと）を【図1】に示す。

資質・能力を育む学習過程例（読むこと）

「認識から思考へ」 「思考から表現へ」



「国語科の思考の枠組み」＝「言葉による見方・考え方」

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目してとらえ、その関係性を問い直して意味づけること

学習過程に沿って学習を進める原動力＝「学びに向かう力・人間性等」

- ①言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 ②自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度
③集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ④心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度 ⑤我が国の言語文化を享受し、継承・発展させようとする態度
⑥自ら進んで読書をすることで人生を豊かにしようとする態度

【図1】資質・能力を育む学習過程例（読むこと）（「答申 別添資料」（2016）P.5 を参考に三つの視点の位置付け等を加えて作成）

(2) 単元構想について

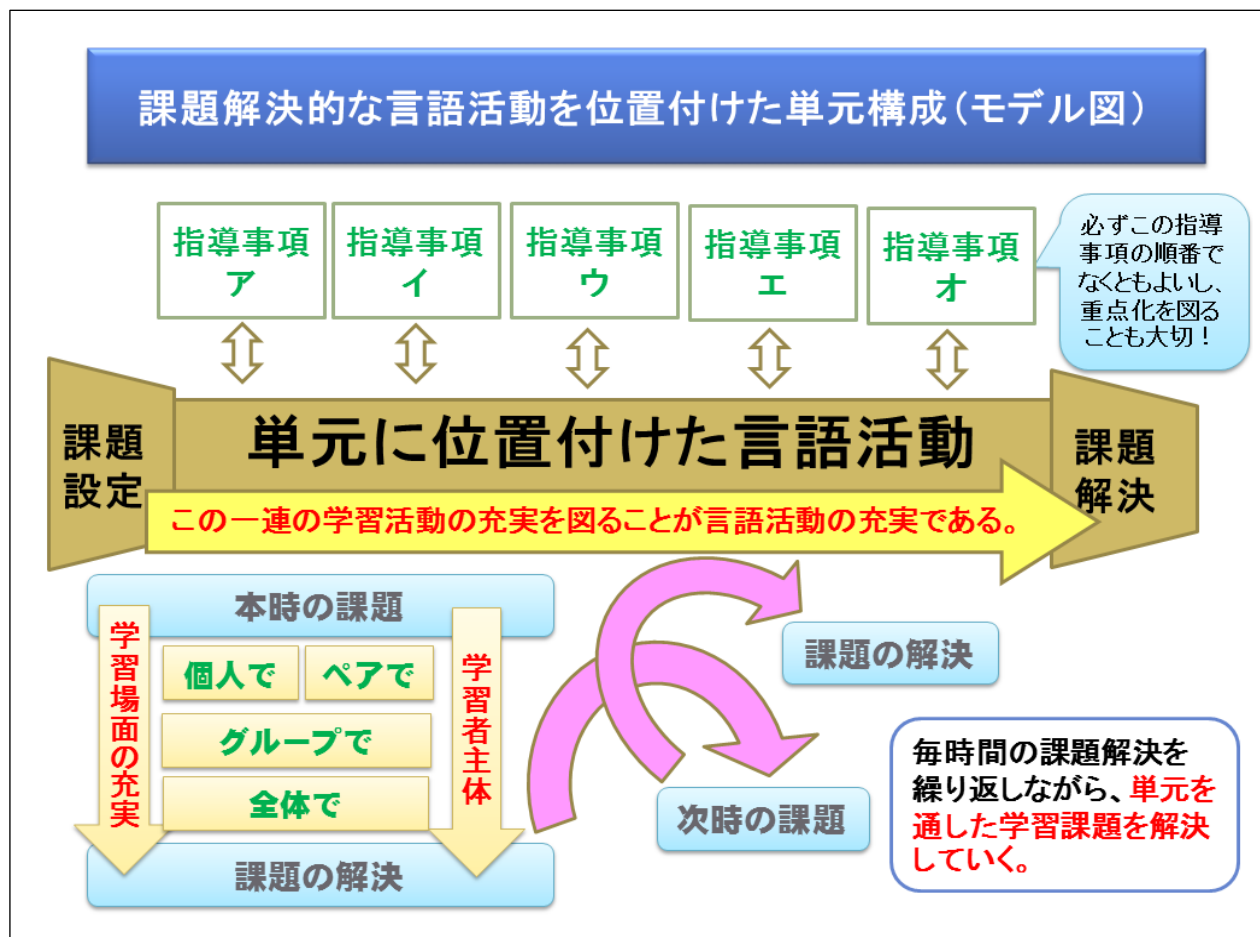
ア 課題解決的な言語活動を位置付けた単元構成

国語科では、これまでも単に「話す・聞く・書く・読む」ことを言語活動ととらえるのではなく、単元を通して大きな課題を解決することについて、言語活動を捉えて効果的な単元開発を目指してきている。

「中学校学習指導要領解説 国語編」(2008)には、「『話すこと・聞くこと』、『書くこと』及び『読むこと』の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の(2)に社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評などの言語活動を具体的に例示している。(P.7)」とある。

本研究では、実社会や実生活との関わりを重視した課題を言語活動として位置付け、基礎的・基本的な知識・技能を活用して解決する中で、思考・判断・表現し、自分の思いや考えを広げ深めていく単元を求めていく。

当センターが昨年まとめた研究報告書を参考に、課題解決的な言語活動を位置付けた単元構成のモデルを【図3】に示します。



【図2】課題解決的な言語活動を位置付けた単元構成のモデル

「学習指導要領を具体化する小・中・高等学校国語科の指導法に関する研究—学びの連続性を考慮し、言語活動の充実を図る授業づくり—研究報告書」(2016) P.5 を一部変更)

イ 思考の過程をたどる単元構成

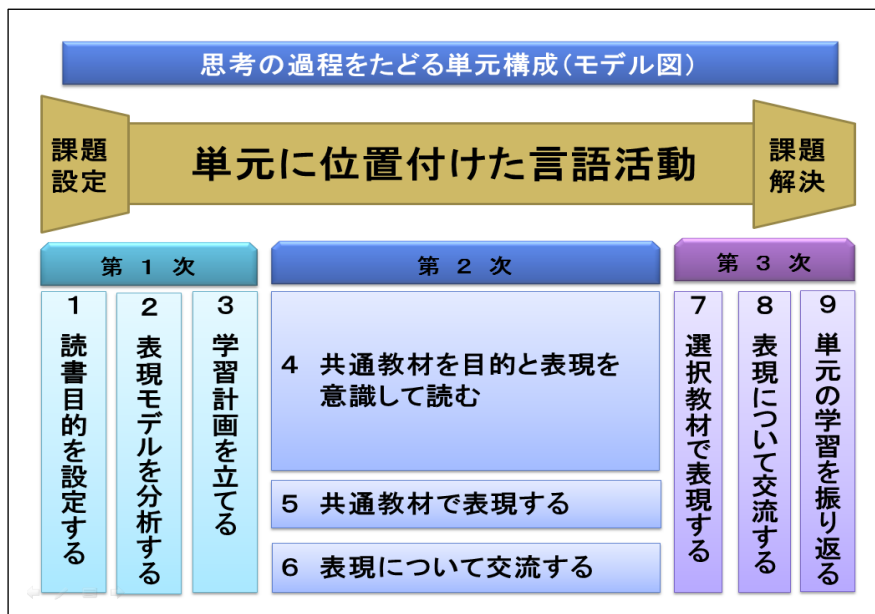
「主体的な学び」の実現にあたって、「子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習」となるようにすることが大事であり、「深い学び」の実現にあたって「子供自身が自分の思考の過程

をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること」が重要であることは前項で記した通りである。

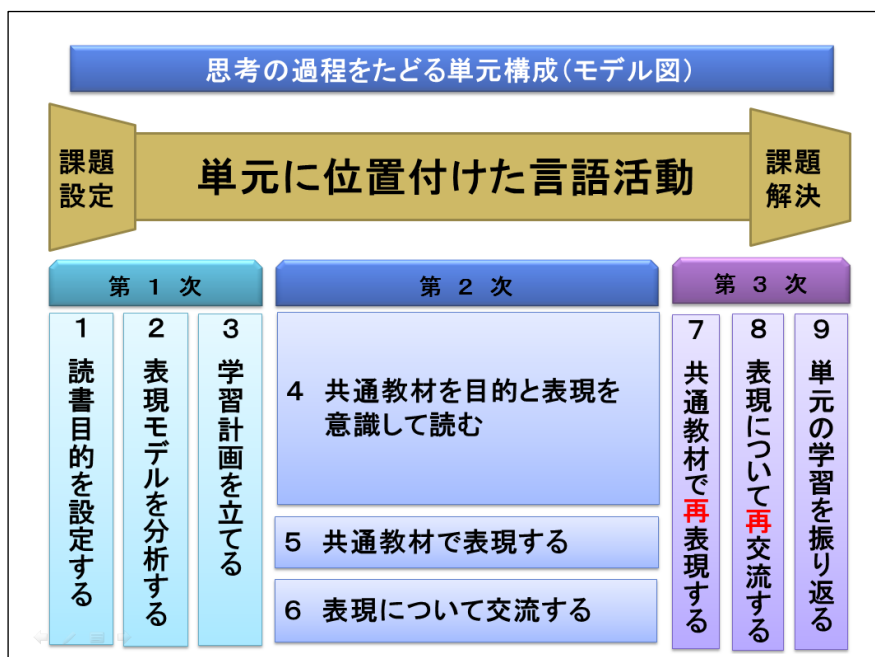
本研究において、「子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習」にするためには、「一次の充実」が欠かせないと考えている。「一次の充実」を進めるためには【図1】「学習目的の理解」にある3つの学習活動を単元に位置付ける必要があると考えている。

「子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること」のためには、「理解し直したり」「表現し直したり」する活動を単元に位置付ける必要があると考えている。

当センターが昨年まとめた研究報告書（「学習指導要領を具体化する小・中・高等学校国語科の指導法に関する研究—学びの連続性を考慮し、言語活動の充実を図る授業づくり—研究報告書」（2016））を参考に「一次の充実」と「思考の過程をたどる単元構成」についてモデル図【図3】【図4】を示す。



【図3】思考の過程をたどる単元構想（共通教材⇒並行読書材）



【図4】思考の過程をたどる単元構想（共通教材での表現⇒共通教材での再表現）

ウ 「アクティブ・ラーニング」の三つの視点と具体的な学習活動の例について

前項(4)でふれた、「アクティブ・ラーニング」の3つの視点と具体的な学習活動の例を【表2】に示す。

【表2】「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

		学習活動の例
「主体的な学び」 の実現に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること ○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること ○学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになること 	<ul style="list-style-type: none"> ○一次の充実を目指した単元構想等を設定する 「読書目的の設定」 「表現モデルの分析」 「学習計画の立案」など <ul style="list-style-type: none"> ・魅力的な表現モデルの提示 ・課題を遂行のために必要な力と課題を遂行することによって身に付く力の分析と、それを定着させるのに有効な学習計画 ○単元に実社会や実生活との関わりを重視した課題解決的な言語活動を位置付ける <ul style="list-style-type: none"> ・本時のゴールが明確な学習課題 ・単元のゴールと言語活動の関連が見える学習課題
「対話的な学び」 の実現に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ○子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返りの方法、視点、活用の充実を図る <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシート等の使用（形式、使用するタイミング） ・学びの方法（方法知）と内容（内容知）についての子供自身の自覚 ○他者との議論や協働等が充実する単元構成を設定する
「深い学び」 の実現に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ○「言葉に対する見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けること ○子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのようにとらえたのか問い直して、理解し直したり、表現し直したりしながら思いや考えを深めること ○思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供たちがお互いの立場や存在を尊重し、相手や目的、条件などを踏まえて表現する学習活動を設定する。 <ul style="list-style-type: none"> ・対話による学習効果（メリット）の共有 ・対話の相手や時間など学習者による何らかの判断や選択 ○自分の思いや考えを広げ深められる単元課題を設定する ○思考の過程をたどることができる単元構成を設定する <ul style="list-style-type: none"> ・共通教材⇒並行読書材 ・共通教材での表現⇒共通教材での再表現

(2) 学習評価について

ア 国語科における学習評価について

現行の国語科においては、「(国語への) 関心・意欲・態度」, 「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」, 「(言語についての) 知識・理解 (・技能)」の観点で評価しているが, 前項で記した通り本研究においては、「知識・技能」 「思考・判断・表現」 「主体的に学習に取り組む態度」を観点として評価する。

その際, 現行の「言語についての知識・理解・技能」がそのまま「知識・技能」に関する観点に, 現行の「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」がそのまま「思考力・判断力・表現力等」に関する観点に移行するものではないという点に留意が必要である。

現行では, 「話す・聞く能力」 「書く能力」 「読む能力」を基礎的・基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせて評価する観点として位置付け, 「(言語についての) 知識・理解 (・技能)」は主に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関わって評価する観点として位置付けられているが, 「国語科において育成を目指す資質・能力の整理」の「知識・技能」には, これまで「知識・理解」としては明確に位置付けられてこなかった, 話したり聞いたり書いたり読んだりする技能も含まれていることなどの違いがある。

本研究実践にあたっては, 中央教育審議会教育課程企画特別部会国語ワーキンググループによる「国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」(2016)による「国語科における評価の観点のイメージ」【表3】を参考とする。

【表3】国語科における評価の観点のイメージ

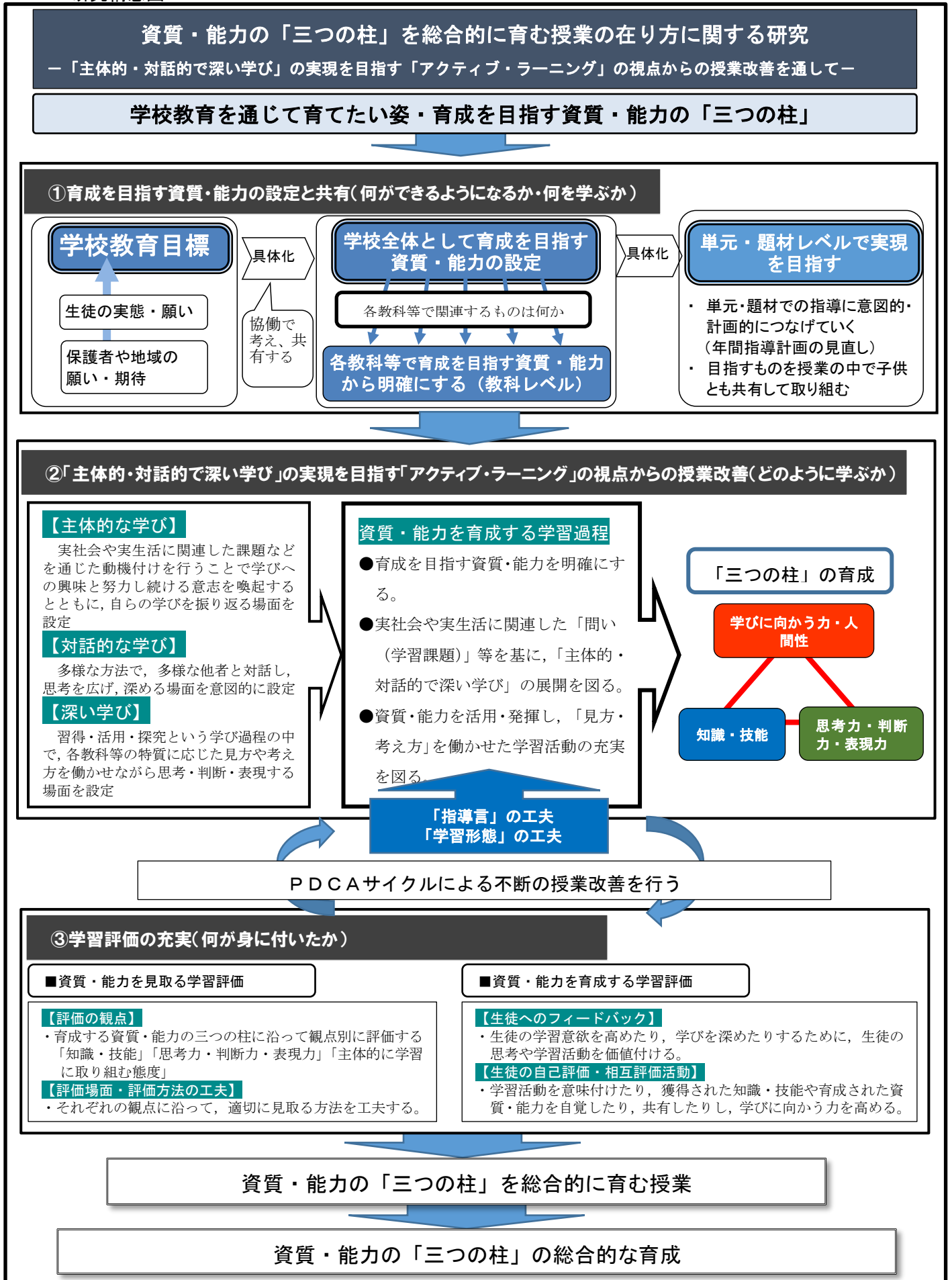
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に 学習に取り組む態度
高等学校	生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし, 多様な他者や社会との関わりの中で, 国語で的確に理解し効果的に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に多様な他者や社会と関わったり, 思いや考えを深めたりしようとするとともに, 言葉の意義を認識し, 自覚的に読書に取り組み, 言葉を効果的に使おうとしている。
中学校	社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし, 社会生活における人との関わりの中で, 国語で正確に理解し適切に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり, 思いや考えを深めたりしようとするとともに, 言葉の価値を認識し, 進んで読書に取り組み, 言葉を適切に使おうとしている。
小学校	日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い, 日常生活における人との関わりの中で, 国語で正確に理解し適切に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり, 思いや考えを深めたりしようとするとともに, 言葉のよさを味わい, 読書に取り組み, 言葉をよりよく使おうとしている。

イ 本研究実践における学習評価

本研究実践では, 以下のことに留意した。

- ・学習評価の目的は, 「学習成果の把握」 「教員の指導改善」 「学習者の学びの推進力」とすること
- ・単元の中に, 学習・指導方法と評価の場面を適切に組み入れること
- ・評価規準は「子供たちにどういった力が身に付いたか」を子供の姿として示すこと
- ・単元に課題解決的な言語活動を位置付け, パフォーマンス評価を行っていくこと
- ・学習活動の中に自己評価を位置付けること

3 研究構想図



Ⅶ 理論構築のための授業実践

1 中学校における授業実践

(1) 授業実践の内容

1 単元名

「ニュースの深層 ～社説を比べて解説しよう～」

- ・主教材「新聞の社説を比較して読もう」(国語3 光村図書)
- ・補助教材「朝日新聞 平成28年8月5日, 11日, 20日, 23日」
「読売新聞 平成28年7月23日, 8月7日, 11日, 19日, 23日」
「産経新聞 平成28年7月23日」

2 単元の目標及び単元で働く「見方・考え方」

(1) 単元の目標

- ・文章の展開の仕方をとらえ、内容の理解に役立てることができる。(知識・技能)
- ・二つの文章を比べ、共通点や相違点を言葉で表現することができる。(思考力・判断力・表現力等)
- ・二つの文章を関連させて自分の考えをもち、言葉で表現することができる。
(思考力・判断力・表現力等)
- ・文章を読んで自分や他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。
(学びに向かう力・人間性等)

{
 現行学習指導要領との関連 「C 読むこと」
 イ 文章の論理の展開の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること
 エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと

(2) 単元で働く「見方・考え方」

新聞社説の表現・内容に対する自分や他の人の考えを広げたり、深めたりするため、同一テーマの複数社説を「見出し」「トピック」「構成」「内容」に着目して捉え、二つの社説を関連させることでそれぞれの特徴を見直して意味付け、言葉で表現すること。

3 単元について

(1) 教材について

主教材「新聞の社説を比較して読もう」は、「和食」が「無形文化遺産」に登録されることになったことについて論じた、2013年10月の新聞二紙の社説である。

補助教材として、「リオ五輪開幕」「ポケモンGO」「山の日」「ホーム転落事故」「リオ五輪閉幕」について論じた社説を二紙併記して示した。

同一テーマに対する複数社説を読むことを通して、単元の目標に迫ろうとするものである。

(2) 生徒について (略)

(3) 言語活動とその特徴について

本単元で行う言語活動として、言語活動例イ「論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと」を具現化し、「ニュースの深層 ～社説を比べて解説しよう～」を位置付ける。

解説原稿には、「見出しからわかること」「それぞれの社説で取り上げたトピックと結び」「構成についての考え」「内容についての考え」を盛り込む。

この活動の遂行にあたっては、目標にある資質・能力を働かせることが重要になると考える。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
社説の構成・展開を読むための必要な観点を理解し、4色で色分けできている。	二つの社説を比較し、共通点や相違点について言葉で表現するとともに、二つの社説を関連付けて自分の考えをもち、言葉で表現している。	社説を読むことを通して、自分のものの見方や考え方を深めよとするとともに、言葉を通じて人と関わり、自分のみではなく他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。

5 単元の指導と評価の計画（全4時間）

次	時	段階	学習課題と主な学習活動	評価規準と評価方法
一	1	学習目的の理解	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早川解説員の解説から、社説解説の意味を見だし、自分の解説についてのプランを立てよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現モデルを分析し、課題遂行に必要な力を見出すことからプランを立てる。 ・グループ内で取り組む社説を分担する。 ・解説原稿1・2を記入する。 	<p>【評価規準（B）】（主）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社説解説によってどのような力が身に付くのかを考えている。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数の視点から考えている。 ・関連性、順序性を捉えて考えている。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板書による可視化 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発言 ・観察 ・振り返りの記述内容
二	2	構造と内容の把握 精査・解釈	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当社説の構成・展開について教科書社説での学びを生かして、可視化（色分け）しよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書の社説の構成・展開の仕方をとらえ、色分けする。 ・自分の担当社説の構成・展開の仕方をとらえ、色分けする。 ・解説原稿3・4を記入する。 	<p>【評価規準（B）】（知・技）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社説の構成・展開を読むための必要な観点を理解し、4色で色分けできている。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効率的に、目的に沿って、色分けできている。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループによる協働及びつまずき予測による机間指導 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
	3	考えの形成及び表現・交流	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社説の共通点や相違点を色分けから浮かび上がった特徴を使い、解説原稿にまとめよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の担当社説を比べ、構成や内容の特徴を見直して意味付けたことを解説原稿5・6にまとめる。 	<p>【評価規準（B）】（思・判・表）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二つの社説を比較し、共通点や相違点について言葉で表現するとともに、二つの社説を関連付けて自分の考えをもち、言葉で表現している。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考察も含めて表現している。 ・自分の考えを見出しと関連させて表現している。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループによる協働及びつまずき予測による机間指導 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
三	4	自分の学習に対する考察	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当社説をこれまでの準備を生かして全力で解説し、身に付いた力を確かめよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の成果を発揮してグループ内で交流する。 ・自他の考えが広がったり深まったりするように質問をしたり、感想を述べたりする。 ・単元の振り返りとして、何ができるようになったかを自分なりにまとめる。 	<p>【評価規準（B）】（主）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉を通じて人と関わり、自分のみではなく他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場、存在を尊重している。 ・自分と関連させて深めている。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習（確認）時間の確保 ・ワークシートへの質問例の記載 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・振り返りの記述内容

6 アクティブ・ラーニングの3つの視点に立った授業改善

	「答申」の記述	実践内容
「主体的な学び」 の実現に向けて	<p>○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること</p> <p>○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わり重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師による課題の演示 ・課題遂行のために必要な「力」を洗い出し、それによる学習プランの作成 ・「学習の道しるべ」の活用による「見通しと振り返り」活動の充実 ・実際の新聞社説を学習材化 ・ポケモンやオリンピック、山の日といった子供たちに身近な話題やホーム転落死といった社会問題に関わる話題の学習材化
「対話的な学び」 の実現に向けて	<p>○互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設ける</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ社説を選択しているもの同士のグループとそれぞれ違うものを選択しているグループの2つによる、学習目的に応じた使い分け
「深い学び」 の実現に向けて	<p>○言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設ける</p> <p>○子供自身が自分の思考の過程をたどり、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同一テーマによる複数社説を教材とし、内容や構成を言葉で理解し、理解したことをもとに社説解説として表現することを通して自分の思いや考えを広げ深める単元課題の設定 ・教科書教材を共通教材として学習を進め、そこでの学びの過程をたどり、自己選択課題に取り組むことで不十分な理解が確かな理解へと深まっていく単元構成及び単位時間の設定

7 本時の目標 (本時1 / 4)

・学習目的を理解し、課題遂行への見通しをもつことができる。

8 本時の展開

過程	学 習 活 動 〔予想される生徒の反応 (◎B, ・C)〕	指導上の留意点と評価規準
導入 10分	1 教材への理解を深める。 (1) 社説の理解 (2) 社説の構成の理解 ・4色に色分けされた社説を読み、各色の色分けの意味について考える。	・社説とは何かを問い、社説への関心を高める。 ・リオ五輪開幕について論じた2社の社説を4色で色分けしたものを配付し、関心を高める。 ・4色の色分けの意味について問うが、時間をかけずに、説明に移る。
展 開	2 本時の学習課題を把握する。 【学習課題】 早川解説員の解説から、社説解説の意味を見出し、自分の解説についてのプランを立てよう。 3 本時の課題を解決する。 (1) 表現モデルにより、ゴールの姿を理解する。 (2) 表現モデルを分析する。 ・単元の課題遂行のために求められる力、あるいは課題遂行により得られる力について考える。 ◎展開をとらえる力、考えをもつ力、比較して特徴をつかむ力、新しい知識・考え ・上手に話す力、集中して文章を読む力、内容を理解する力 ・それらの力に順序付けを行い、学習プランを立てる。	・単元に位置付けた言語活動である社説解説を指導者が演示する。 【評価規準 (B)】 (主) ・社説解説によってどのような力が身に付くのかを考えている。 【Aの視点 (例)】 ・複数の視点から考えている。 ・関連性、順序性をとらえて考えている。 【Cの手立て】 ・板書による可視化 【評価方法】 ・発言、観察 ・振り返りの記述内容
32分	4 解説を担当する社説をグループで分担する。 (1) 3～4人グループ内で分担する。 (2) 分担にそって解説原稿の「1」「2」を記入する。	・「ポケモンGO」「山の日」「ホーム転落事故」「リオ五輪閉幕」について論じた社説を各グループそれぞれ一人ずつ担当する。
終 末	5 学習を振り返る。 今日、モデルを分析して、最終的にどんなことができればいいのかを確かめることができました。自分はこの活動を通して、特に、展開をとらえる力を高めたいと思います。自分が取り組む社説も決めたので、次回から発表に向けて頑張りたいです。	
8分	6 次時の見通しをもつ。	

7 本時の目標 (本時2 / 4)

- ・学習目的に沿って、構成展開の理解、内容把握をすることができる。

8 本時の展開

過程	<p style="text-align: center;">----- 学 習 活 動 -----</p> <p style="text-align: center;">┌ 予想される生徒の反応 (◎B₂・C) ┐</p>	指導上の留意点と評価規準
導入	1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。 2 本時の学習課題を把握する。	<ul style="list-style-type: none"> ・紙板書により単元名と付けたい力を表示することで意識化を図る。
5分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【学習課題】 担当社説の構成・展開について教科書社説での学びを生かして、可視化（色分け）しよう。 </div>	
展	3 本時の見通しをもつ。 4 本時の課題を解決する。 (1) 共通テキストで4色色分けを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・4色色分けの方法を確認し、色分けをする。 ・各色の内容について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習の道しるべ」の【目指す姿】を確認することで見通しをもたせる。 ・個人での活動のあと、グループでの交流の時間を短時間設け、訂正や補強を図る。
開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【まとめ】 4色色分け法により、大きく展開をとらえ、内容の理解に役立てることができる。 </div>	
37分	(2) 選択テキストで4色色分けを行う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> ◎見出しと最終段落に赤線を引き、内容をつかむ→そのことに関するプラスのトピック（緑）とマイナスのトピック（青）を色分けする→その他を黄色とする ・緑と青の判断に迷う。 ・同一段落に複数の色が混在する。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・発表用フリップに清書する。 ・解説原稿「3」「4」を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同一選択者同士のグループに組み替える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【評価規準（B）】（知・技） ・社説の構成・展開を読むための必要な観点を理解し、4色で色分けできている。 【Aの視点（例）】 ・効率的に、目的に沿って色分けできている。 【Cの手立て】 ・グループによる協働及びつまづき予測による机間指導 【評価方法】 ・学習シート、観察 ・振り返りの記述内容 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・個人での活動のあと、グループでの交流の時間を短時間設け、訂正や補強を図る。
終末	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 5 学習を振り返る。 今日、4色色分け法を使って、社説の展開をとらえることができました。最初難しいと思いましたが、教科書でやってみて、自分の担当でやってみて、やり方がわかりました。家の新聞でもチャレンジしてみたいと思いました。 </div>	
8分	6 次時の見通しをもつ。	

7 本時の目標 (本時3/4)

・学習目的に沿って、文章の構成や内容について自分の考えを形成することができる。

8 本時の展開

過程	学習活動 [予想される生徒の反応 (◎B, ・C)]	指導上の留意点と評価規準
導入 5分	1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。 2 本時の学習課題を把握する。	・紙板書により単元名と付けたい力を表示することで意識化を図る。
展開 37分	3 本時の見通しをもつ。 4 本時の課題を解決する。 (1) 特徴を見るための観点を確認する。 ア 緑と青の面積 イ 緑と青の順序 ウ Aの緑(青)とBの緑(青)の取り上げたトピック (2) 共通テキストを上記の観点で見て意見交流する。 (3) 選択テキストを使い、社説の共通点や相違点を色分けから浮かび上がった特徴を使い、解説原稿にまとめる。 ◎アイウの観点により共通点・相違点を明らかにし、それによって印象等がどのように違うか自分の考えを書く。 ・観点に沿って社説を分析できない。 ・違いは分かるものの言葉で表現できない。 ・違いは表現できるものの、それに対する自分の考えをもてない。	・「学習の道しるべ」の【目指す姿】を確認することで見通しをもたせる。 ・同一選択者同士のグループ体制にする。 【評価規準(B)】(思・判・表) ・二つの社説を比較し、共通点や相違点について言葉で表現するとともに、二つの社説を関連付けて自分の考えをもっている。 【Aの視点(例)】 ・考察も含めて表現している。 ・自分の考えを見出しと関連させて表現している。 【Cの手立て】 ・グループによる協働及びつまずき予測による机間指導 【評価方法】 ・学習シート、観察 ・振り返りの記述内容
終末 8分	5 学習を振り返る。 今日、色分けしたことによって見えてくる特徴を観点に沿って見ていきました。共通点や相違点が明らかになったのでよかったです。次回は発表なので、伝わるように解説したいです。	6 次時の見通しをもつ。

7 本時の目標 (本時4 / 4)

・学習目的に沿って、表現活動を行い、課題遂行によって付いた力を自覚することができる。

8 本時の展開

過程	<p style="text-align: center;">学 習 活 動</p> <p style="text-align: center;">┌ 予想される生徒の反応 (◎B, ・C) ┐</p>	指導上の留意点と評価規準
導入	<p>1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。</p> <p>2 本時の学習課題を把握する。</p>	<p>・紙板書により単元名と付けたい力を表示することで意識化を図る。</p>
5分	<p>【学習課題】</p> <p>担当社説をこれまでの準備を生かして全力で解説し、身に付いた力を確かめよう。</p>	
展開	<p>3 本時の見通しをもつ。</p> <p>ア 練習 (確認) 5分</p> <p>イ 解説・交流 8分×4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5分程度で解説 ・3分程度で交流 <p>ウ 単元の振り返り 8分</p> <p>4 本時の課題を解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見通しに沿って活動する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>◎解説原稿をもとにグループ内で発表・交流を行い、質問をしたり、感想を述べたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表できない。 ・質問ができず、感想も言えない。 </div>	<p>・「学習の道しるべ」の【目指す姿】を確認することで見通しをもたせる。</p> <p>・個人での活動のあと、グループでの交流の時間を短時間設け、訂正や補強を図る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【評価規準 (B)】 (主)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社説を読むことを通して、自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、言葉を通じて人と関わり、自分のみではなく他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。 <p>【Aの視点 (例)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場、存在を尊重している。 ・自分と関連させて深めている。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習 (確認) 時間の確保 ・ワークシートへの質問例の記載 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート, 観察 ・振り返りの記述内容 </div>
37分	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>この単元では、社説を解説するという活動を通して、文章を比較してその違いを見つける力と、それを言葉で表現する力が付いたと思います。今回学習したことは、これからの説明文を読むときや、人に何を伝えるときにも使えると思うのでよかったです。</p> </div>	
終末	<p>5 学習を振り返る。</p> <p>6 次時の見通しをもつ。</p>	

(2) 授業実践後の捉え

ア 「主体的な学びの実現」に係る振り返り・記述から

「主体的な学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表3】に示す。

【表3】「主体的な学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「主体的な学びの実現」に向けて		
「答申」の記述	<ul style="list-style-type: none"> ○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう, 学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること ○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう, 実社会や実生活との関わり重視した学習課題として, 子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること 	
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教師による課題の演示 ・課題遂行のために必要な「力」を洗い出し, それによる学習プランの作成 ・「学習の道しるべ」の活用による「見通しと振り返り」活動の充実 ・ポケモンやオリンピック, 山の日といった子供たちに身近な話題やホーム転落死といった社会問題に関わる話題の学習材化 	
振り返り及び観察の記述	生徒の振り返り	参観者の観察
	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに先生の社説の解説を聞いて, とてもイメージがわきやすく「やるぞ」という気持ちになりました。 ・解説を聞いて, 自分もあのようにできるようにがんばりたいと思いました。 ・始めに課題を立てて, 最後にまとめ, 振り返りをするという作業は, 次の授業への「バネ」みたいでとてもよかったです。 ・社説を解説するためには, まず, 自分が内容をよく理解すること, 相手に伝える表現力を付けることが大切になってくるのでがんばりたい。 ・社説を読み比べることで, いろいろな見方や考え方がわかることがわかり勉強になりました。一つの見方だけではなく, 複数の論を比較し, 評価することが大切だと思いました。 ・社説だけではなく, ニュースなどを比べて, 相違点や共通点を比べたり, 自分なりに考えてみたりするなどしていきたい。 ・ニュースで目にするようなことをテーマとした授業でとても楽しく授業を受けることができました。今回の授業を受けて新聞を読みようという気持ちになりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを明確に示し, 意欲付けを図っていた。単元のゴールの姿を提示することは, 生徒たちに見通しをもたせる有効な手段であると感じた。 ・「道しるべ」を用い, 見通しをもたせ, 「目指す姿」を確認させ, 授業の振り返りをさせていた。大変有効である。 ・どんな順番で学びが深まるかを考えさせていた。国語で付けてきた力を生徒たちなりに考えていることを感じた。 ・「単元名」と「付けたい力」を毎時間始めに確認し, 提示することで, 生徒たちは振り返りの時間に「何の力が身に付いているか」を意識するようになった。

イ 「対話的な学びの実現」に係る振り返り・記述から

「対話的な学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表4】に示す。

【表4】「対話的な学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「対話的な学びの実現」に向けて		
「答申」の記述	○互いの知見や考えを広げたり, 深めたり, 高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設ける。	
実践内容	・同じ社説を選択しているもの同士のグループとそれぞれ違うものを選択しているグループの2つによる, 学習目的に応じた使い分け	
振り返り及び観察の記述	生徒の振り返り	参観者の観察
	<ul style="list-style-type: none"> ・プラス面, マイナス面のまとめ方がわからなかったが, 同じ社説を担当しているグループの人から教えてもらってできた。 ・4色色分けをしながら周りの人と交流できてよかった。 ・同じ社説をしている人たちでグループを作って活動して, うまくまとめられたのでよかった。 ・全て色分けすることができた。周りの人とも交流ができたし, 席を移動して同じのを選んだ人同士の交流はやりやすいと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から呼びかけてグループを作らせることはこれまでやったことがなかったので, 錯綜するのではないかと心配したが, わりと2分ほどでグループを作っていた。有効であると感じた。 ・同じ題材を選んだもの同士でグループを作り, グループ体制で色分けする際, 「ここはどうなった?」と聴き合い, 学び合う姿勢が見られた。

ウ 「深い学びの実現」に係る振り返り・記述から

「深い学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表5】に示す。

【表5】「深い学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「深い学びの実現」に向けて	
「答申」の記述	<ul style="list-style-type: none"> ○言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設ける ○子供自身が自分の思考の過程をたどり, 理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・同一テーマによる複数社説を教材とし, 内容や構成を言葉で理解し, 理解したことをもとに社説解説として表現することを通して自分の思いや考えを広げ深める単元課題の設定 ・教科書教材を共通教材として学習を進め, そこでの学びの過程をたどり, 自己選択課題取り組むことで不十分な理解が確かな理解へと深まっていく単元構成及び単位時間の設定

	生徒の振り返り	参観者の観察
振り返り及び 観察の記述	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書で一度やってみてから、自分でやっ て色分けがしっかりできるようになった。内 容を深く理解して、社説への意見をまとめた い。 ・会社により、同じ問題でも解釈の仕方により、 伝え方が異なり、読者の感じ方につながるこ とがわかりました。この授業を受け、社説の おもしろい読み比べ方、それを伝える力がつ いたような気がします。 ・自分は「ホーム転落死」についてやりました。 はじめは全然わかりませんでしたが、発表に 向けて作業を進めていくうちにわかってき ました。発表の時は、しっかり相手に伝える ことができました。また、相手の社説につい ても質問や意見などをして深め合えたので よかったです。 ・今回の学習では、二つの社説の共通点や相違 点を言葉にする力がついたと思う。自分の考 えを他の人に伝え、広げる力をもっとつけら れるようにがんばりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段は集中力に欠ける場面があ る生徒も集中して活動に取り 組んでいた。迷わずラインを引 いている生徒が多かった。 ・解説原稿の「5, 6」を記入さ せる際、構造化された板書で視 点を示していた。生徒にとって 理解しやすく、参考にして原稿 をまとめていた。 ・評価規準を生徒にとってわかり やすい言葉で表現していたこ とにより、より高いレベルを目 指してがんばろうとする姿が 見られた。 ・学習経験の不足のせいか、発表 者の発表終了後、感想や意見が 出ないまま時間が過ぎるグル ープがあった。今後指導してい きたい。

(3) 理論実現のための留意点

ア 「主体的な学びの実現」に向けて

教師による解説の演示や「道しるべ」を活用した見通しと振り返り活動により、学ぶことへの興味や関心が高まっていたことがわかる。「やってみよう」と思わせるモデルの提示が課題解決的な言語活動を進める上で、重要なポイントとなる。「学習の道しるべ」は、有効であるものの、その内容、提示時期、活用方法等についてさらに実践を踏まえて、研究を進める必要がある。

ポケモンやオリンピック、山の日といった子供たちに身近な話題やホーム転落死といった社会問題に関わる話題の学習材化によって、子供たちの学ぶ意欲の高まりが見られた。実社会や実生活の中から、子供たちの学ぶ意欲が高まるような学習材を見つけていくことが大切である。

イ 「対話的な学びの実現」に向けて

同じ社説を選択しているもの同士のグループとそれぞれ違うものを選択しているグループの2つによる、学習目的に応じた使い分けは生徒の意欲面に対しても、また、互いの知見を広げたり高めたりすることに対しても有効に働いていたことがわかる。

「対話的な学びの実現」に向けては、対話的な言語活動を行う学習場面を計画的に設けることが必要であるが、それは単に、「個人で考え、ペアで交流し、グループで広げ、全体交流で深める」といった手順を追うことではない。「主体的な学び」と同様に、「子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習」とならなければならない。

そのためには、対話による学習成果（メリット）が共有されている必要があるだろうと考える。また、学習者に何らかの選択をさせる必要があるのではないかと考える。今回は対話をしたい「人」を選択させた。どういったことをどこまで選択させるかといったことが「対話的な学びの実現」に向けた一つのポイントであると考え。

ウ 「深い学びの実現」に向けて

同一テーマによる複数社説を教材とし、内容や構成を言葉で理解し、理解したことをもとに社説解説として表現するという課題を行っていくことで自分の思いや考えを広げ深める姿が見られた。ただ、最後に発表があれば深まるというものではない。学びの深まりは、「見方・考え方」をどう働かせているかが大事であるが、それは知識や技能の質や量が支えている。

教科書教材を共通教材として学習を進め、そこでの学びの過程をたどり、自己選択課題に取り組むという学びの過程をとったことで社説の構成や展開の理解（及び色分けの技能習得）が図られ、自己選択課題への取組意欲の向上につながったものと考えられる。

エ 「見方・考え方」を軸とした単元構想に向けて

単元で働く「見方・考え方」を構造的に捉え（【資料1】）、それに基づいた単元の指導を展開することにより、付けたい力を指導者が意識するとともに、学習者も付いた力を実感できる学びとすることができた。

単元で働く「見方・考え方」を明確に示すなど、どういった「見方・考え方」を働かせようとしているのか、どういった「見方・考え方」が働き、「道具」として使えるようになるのかを授業者と学習者が共有することが大切になる。

【資料1】単元で働く「見方・考え方」の構造

(場・対象)	・新聞社説の表現・内容に対する
(学びに向かう力、人間性等)	・自分や他の人の考えを広げたり、深めたりするため、
(知識・技能)	・同一テーマの複数社説を「見出し」「トピック」「構成」「内容」に着目して捉え、
(思考力・判断力・表現力等)	・二つの社説を関連させることでそれぞれの特徴を見直して意味付け、言葉で表現すること。

オ 学習評価の充実にに向けて

目標に準拠した評価を着実に実施するためには、各教科の目標だけでなく、領域や内容項目レベルの学習指導のねらいが明確になっている必要がある。また、学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたというのは、どのような状態になっているかが具体的に想定されている必要がある。このような生徒の学習状況を具体的に示したものが「評価規準」であると捉えて、評価規準を設定していくことが大切になる。

本実践のように解説原稿によるパフォーマンス評価を行う際には、具体的にどのような記述があれば「おおむね満足できる」であるのか、それに加えて具体的にどのような記述があれば「十分満足できる」と言えるのかを指導者が明確にもっておく必要がある。明確にするために、指導者がまず、言語活動に取り組むことは非常に有効であった。自らが実践しておくことで、生徒への指導に生きてくる。「生徒の学習成果を捉える評価」に留まらず、「生徒を伸ばす評価」にしていくことが大切である。

生徒自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうために自己評価は有効である。自己評価は、「学びの方法（方法知）」と「学びの内容（内容知）」を自覚した内容を期待したい。自己評価は、生徒自身の学びの自覚のみではなく、指導者の振り返りにも生かすことが大切である。「授業改善に生かす評価」として捉え、取り組んでいくことが求められよう。

2 高等学校における授業実践

(1) 授業実践の内容

1 単元名

「評論の対比構造をとらえ、筆者の主張を読みとろう」

- ・主教材「水の東西」(国語総合 数研出版)
- ・補助教材「菊とポケモン」(新潮社)

2 単元の目標及び単元で働く「見方・考え方」

(1) 単元の目標

- ・文章の構成や展開の仕方をとらえ、内容の理解に役立てることができる。(知識・技能)
- ・文書の論理展開に見られる「対比」を図式化することができる。(思考力・判断力・表現力等)
- ・文章構成をもとに、要旨や筆者の主張を捉え、自分の考えと結び付けて言葉で表現することができる。(思考力・判断力・表現力等)
- ・文章を読んで自分や他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。(学びに向かう力・人間性等)

現行学習指導要領との関連 「C 読むこと」

- イ 文章の内容を叙述に即して読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。
- エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現について評価したり、書き手の意図を捉えたりすること。

(2) 単元で働く「見方・働き方」

評論の表現・内容に対する自分や他の人の考えを広げたり、深めたりするため、比較文化論の目的、特徴に着目し、論理の展開(対比)を図式化することで評論の要旨や筆者の主張を捉え、捉えたことについて自分の考えをもち、言葉で表現すること。

3 単元について

(1) 教材について

主教材「水の東西」は、論理的・対比的に緻密に構成されており、日本の鹿おどしと西洋の噴水による自然観と文化背景の相違から、水に対する意識・イメージに日本的心性の特徴が見られると述べられている。このような文章に触れることは、普段から何気なく接している存在を見つめなおし、また東西文化の相違を考えていくきっかけを与えられると同時に、新しいものの見方や発想を生み出し広げていくことにつながる。これからグローバル社会を生きる人々にぜひ接して欲しい教材である。

ただし、評論を読むことへの生徒たちの抵抗感の払拭と対比構造を理解する手がかりとなるよう、導入の補助教材として「菊とポケモン」を用いた。

(2) 生徒について(略)

(3) 言語活動とその特徴について

本単元で行う言語活動として、「水の東西」で対比構造を図式化し、文章構成をとらえた後、「水の東西」の対比構造と4段落構成に倣い、筆者の主張について100字程度で記述する。

この活動の遂行にあたっては、目標にある資質・能力を働かせることが重要になると考える。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
比較文化論を読むための、対比による文章構造を理解し、文中における対比関係を指摘することができる。	論理の展開、構成に即して対比構造を図式化するとともに、要旨や筆者の主張をとらえ、自分の考えと結び付けて言葉で表現している。	比較文化論を読むことを通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、言葉を通じて人と関わり、自分のみではなく他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。

5 単元の指導と評価の計画（全4時間）

次	時	段階	学習課題と主な学習活動	評価規準と評価方法
一	1	学習目的の理解	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「対比」構造を理解しよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入教材を分析し， <ul style="list-style-type: none"> ①対比関係にある語や表現を見つけ，赤線と青線で引き分ける。 ②グループで互いの見解を共有しながら，学習シートにまとめていく。 ③個々に構成図を作成し，筆者の主張を記述する。 ・主教材を通読して，単元の見通しを確認した後，個々に構成図を作り，筆者の主張を記述する。 	<p>【評価規準（B）】（知・技）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較文化論を読むための，対比による文章構造を理解し，文中における対比関係を指摘することができる。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主張に結びつく対比関係について指摘することができる。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループによる協働，机間指導による支援 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
二	2	構造と内容の把握	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「水」の楽しみ方の日本人と西洋人の違いを整理しよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〈第一段落と第二段落の読解〉 <ul style="list-style-type: none"> ○「水」の楽しみ方の日本人と西洋人の違いについて，対比関係にある語や表現から読み取る。 *グループ・全体で互いの見解を共有 	<p>【評価規準（B）】（思・判・表）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「水」の楽しみ方の日本人と西洋人の違いを整理し，図式化している。 <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体をふまえ，抽象化した部分も押さえられている。 <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループによる協働，机間指導による支援 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
			3	精査・解釈
三	4	考えの形成及び表現・交流 自分の学習に対する考察	<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人と西洋人の感性の違いを整理し筆者の主張を言葉で表現してみよう。 <p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で交流する。 ・自他の考えが広がったり，深まったりするように質問をしたり，感想を述べたりし，グループとしての構成図を作成する。 ・全体で交流し，分析する。 ・単元の振り返りとして，交流後にもう一度，個々に構成図の作成と筆者の主張をまとめ直し，1度目のものと見比べ，何ができるようになったかを自分なりにまとめる。 	<p>【評価規準（B）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成図をもとに，要旨や筆者の主張をとらえ，自分の考えと結び付けて言葉で表現している。（思・判・表） ・言葉を通じて人と関わり，自分のみではなく他の人の考えを広げたり，深めたりしようとしている。（主） <p>【Aの視点（例）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「流れる水と噴き上げる水」，「時間的な水と空間的な水」，「見えない水と目に見える水」の全ての項目について記述している。（思・判・表） ・相手の立場，存在を尊重している。（主） <p>【Cの手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループによる協働，机間指導による支援 <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容

6 アクティブ・ラーニングの3つの視点に立った授業改善

	「答申」の記述	実践内容
「主体的な学び」 の実現に向けて	<p>○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること</p> <p>○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わり重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習シート」の活用による「見通しと振り返り」活動の充実 ・課題遂行のために必要な「力」を洗い出し、それによる学習プランの作成 ・生徒たちにとって身近な話題として、日本文化であるマンガが生まれた社会背景について述べられた評論の学習材化
「対話的な学び」 の実現に向けて	<p>○互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設けること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・構成図の作成と筆者の主張をまとめる際のグループ、全体での交流
「深い学び」 の実現に向けて	<p>○言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けること</p> <p>○子供自身が自分の思考の過程をたどり、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・補助教材の内容や構成を言葉で理解し、理解したことを構成図に表したり、読み取った筆者の主張について記述したりして、自分の思いや考えを広げ深める単元課題の設定 ・教科書教材を主教材として学習を進め、補助教材での学びの過程をたどり、不十分な理解が確かな理解へと深まっていく単元構成及び単位時間の設定

7 本時の目標 (本時1 / 4)

- ・学習目的を理解し、課題遂行への見通しを持つことができる。

8 本時の展開

過程	学習活動 〔予想される生徒の反応 (◎B, ・C)〕	指導上の留意点と評価規準
導入 10分	1 教材への理解を深める。 ・対比の理解	・身近な例をもとに、対比について関心を高める。 ・対比の構造や構成図について理解する。
展開 32分	2 本時の学習課題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">【学習課題】 対比構造を理解しよう。</div> 3 本時の課題を解決する。 (1) 補助教材の演習が、ゴールの姿に至ることを確認する。 (2) 補助教材を分析し、対比構造を理解する。 ・導入教材を分析し、 ①対比関係にある語や表現を見つけ、赤線と青線で引き分ける。 ②グループで互いの見解を共有しながら情報を絞り、a～eの項目について学習シートにまとめていく。 ③ (共有できたものを参考に) 個々に構成図を作成し、筆者の主張を記述する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;">◎展開をとらえる力、考えをもつ力、比較して特徴をつかむ力、新しい知識を身につける力、集中して文章を読む力、内容を理解する力を意識する。 ・対比関係にある要素を見つけられない。 ・筆者の主張を記述できない。</div> (3) 主教材を通読して、単元の見通しを確認した後、個々に構成図を作り、筆者の主張を記述する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">【まとめ】 課題を解決するために必要な力を考え、主教材で深めることを確認したことでプランとなる。</div>	・補助教材「菊とポケモン」で演習しながら、単元に位置付けた言語活動である構成図の作成を理解する。 ・他者と交流することで、自分の作成した構成図を客観的な視点で見直し、修正する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">【評価規準 (B)】 (知・技) ・比較文化論を読むための、対比による文章構造を理解し、文中における対比関係を指摘することができる。 【Aの視点 (例)】 ・主張に結び付く対比関係について指摘することができる。 【Cの手立て】 ・グループによる協働、机間指導による支援 【評価方法】 ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容 グループによる協働、机間指導による支援</div>
終末 8分	4 学習を振り返る。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;">今日は、補助教材を分析して、対比構造を意識して読むことの大切さを確かめることができました。自分はこの活動を通して、特に、展開をとらえる力を高めたいと思います。「水の東西」では自分の力で構成図を完成させられるように頑張っていきたいです。</div> 5 次時の見通しをもつ。 ・主教材「水の東西」の構成図を作成し、筆者の主張を読み取ることを学んでいくことを確認する。	・個々に構成図を作成し、筆者の主張を記述しておくことを指示する。

7 本時の目標 (本時2 / 4)

・学習目的にそって、構成展開の理解、内容把握をすることができる。

8 本時の展開

過程	学 習 活 動 「予想される生徒の反応 (◎B・C)」	指導上の留意点と評価規準
導入 5分	1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。 2 本時の学習課題を把握する。 【学習課題】 「水」の楽しみ方の日本人と西洋人の違いを整理しよう。	・板書により単元名と付けたい力を明示することで意識化を図る。
展開 37分	3 本時の見通しをもつ。 ・「水の東西」第1段落と第2段落を音読する。 4 本時の課題を解決する。 (1) 第1段落と第2段落で、難解な語句の意味を確認する。 (2) 個人で対比関係にある語や表現を見つけ出す。 ・第1段落と第2段落において、日本人の「水」の仕掛けや向き合い方が読み取れるものを赤で、西洋人の「水」の仕掛けや向き合い方が読み取れるものを青で、それぞれ線を引く。 ◎線を引いた箇所から対比関係が見えてくる。具体と抽象の部分に気づける。 ・どこまで線を引き分ければよいか迷う。 ・学習シートに書き出す。 (3) グループで交流し、対比関係にある語や表現をホワイトボードに書き出し、黒板に貼りだして全体で分析をする。 ・共通する部分と異なる部分を確認し、異なる部分について取り上げる必要があるか否かを検討する。 (4) 交流で得られた情報をもとに、個々に自分の見解について見直し、修正したものを学習シートに記述する。 【まとめ】 対比の関係を見出すことで、内容の理解に役立てることができる。	・個々の「変容」を見取るため、個人の作業を大切に にする。 ・個人での活動の後、グループでの交流の時間を短時間 設け、訂正や補強を図る。 【評価規準 (B)】 (思・判・表) ・「水」の楽しみ方の日本人と西洋人の違いを整理し、図式化している。 【Aの視点 (例)】 ・具体(「鹿おどし」と「噴水」)をふまえ、抽象化した部分も押さえられている。 【Cの手立て】 ・グループによる協働、机間指導による支援 【評価方法】 ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
終末 8分	5 学習を振り返る。 今日、主教材「水の東西」の第1・2段落について、対比関係にある語や表現を整理しました。文末の「～ない。」や対義語に注目すると見つけられるような気がしました。第3・4段落ではさらに理解を深めたいです。 6 次時の見通しをもつ。	

7 本時の目標 (本時3 / 4)

・学習目的にそって、構成展開の理解、内容把握をすることができる。

8 本時の展開

過程	学 習 活 動 〔予想される生徒の反応 (◎B, ・C)〕	指導上の留意点と評価規準
導入	1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。 2 本時の学習課題を把握する。	・板書により単元名と付けたい力を明示することで意識化を図る。
5分	【学習課題】 日本人と西洋人の感性の違いを整理し、筆者の主張を言葉で表現してみよう。	
展開	3 本時の見通しをもつ。 ・「水の東西」第3段落と第4段落を音読する。 4 本時の課題を解決する。 (1) 第3段落と第4段落で、難解な語句の意味を確認する。 (2) 個人で対比関係にある語や表現を見つ出す。 ・第3段落と第4段落において、日本に「噴水」が作られなかった理由が記述された部分を赤で、西洋に「噴水」が作られた理由が記述された部分を青で、それぞれ線を引く。 ◎赤線が引かれた部分の記述が、日本人の内面的な事情が関係していることに気づく。 ・どこまで線を引けばよいか迷う。 ・学習シートに書き出す。 (3) グループで交流し、対比関係にある語や表現をホワイトボードに書き出し、黒板に貼りだして全体で分析をする。 ・共通する部分と異なる部分を確認し、異なる部分について取り上げる必要があるか否かを検討する。 (4) 交流で得られた情報をもとに、個々に自分の見解について見直し、修正したものを学習シートに記述する。 【まとめ】 対比の関係を見出すことで、内容の理解に役立てることができる。	・個々の「変容」を見取るため、個人の作業を大切に する。 ・個人での活動の後、グループでの交流の時間を短時間 間設け、訂正や補強を図る。 【評価規準 (B)】 (思・判・表) ・日本人と西洋人の感性の違いを理解し、図式化 している。 【Aの視点 (例)】 ・外面的な事情と内面的な事情があること、「鹿 おどし」の特徴と日本人の感性を関連付けてい る部分があることを押さえている。 【Cの手立て】 ・グループによる協働、机間指導による支援 【評価方法】 ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
終末	5 学習を振り返る。 今日、第3・4段落について、対比関係にある語や表現を整理しているうちに、水の鑑賞を通して、日本人と西洋人の考え方の違いは心の中にあるのではないかと感じました。次は、全体の構成図の作成と筆者の主張の記述になるので、今までの読みを生かしてみたい。 6 次時の見通しをもつ。	

7 本時の目標 (本時4 / 4)

- ・学習目的にそって、文章の構成や内容について自分の考えを形成し、課題遂行によって付いた力を自覚することができる。

8 本時の展開

過程	学習活動 [予想される生徒の反応 (◎B,・C)]	指導上の留意点と評価規準
導入 5分	1 本単元のねらいと前時の学習を確認する。 2 本時の学習課題を把握する。 【学習課題】 日本人と西洋人の感性の違いを整理し、筆者の主張を言葉で表現してみよう。	・板書により単元名と付けたい力を明示することで意識化を図る。
展開 37分	3 本時の見通しをもつ。 ・構成図と筆者の主張をまとめることを確認す 4 本時の課題を解決する。 (1) 前時までに取り読みの対比関係の内容をもとに、個々に構成図を学習シートに作成する。 (2) グループで交流し、構成図をホワイトボードに書き、黒板に貼りだして全体で分析をする。 ・グループ内で、自他の考えが広がったり深まったりするように質問をしたり、感想を述べたりし、グループとしての構成図を作成した後、全体で交流する。 ◎「鹿おどし」の記述部分(第4段落)に着目し、筆者の主張(水の鑑賞が日本人の内面と結びついている)に関わっていることを理解する。 ・「鹿おどし」と筆者の主張との関連に気づかない。 (3) 交流で得られた情報をもとに、個々に自分の構成図について修正したものを学習シートに完成させた後、筆者の主張を100字でまとめる。 ◎学習前には、筆者の主張を言葉で表現できなかったものが、学習活動を通して言葉で表現できるようになる。 ・筆者の主張を記述できない。	・グループでの交流の後、全体交流の時間を設け、訂正や補強を図る。 【評価規準(B)】 ・構成図をもとに、要旨や筆者の主張を捉え、自分の考えと結び付けて言葉で表現している。(思・判・表) ・言葉を通じて人と関わり、自分のみではなく他の人の考えを広げたり、深めたりしようとしている。(主) 【Aの視点(例)】 ・「流れる水と噴き上げる水」、「時間的な水と空間的な水」、「見えない水と目に見える水」の全ての項目について記述している。(思・判・表) ・相手の立場、存在を尊重している。(主) 【Cの手立て】 ・グループによる協働、机間指導による支援 【評価方法】 ・学習シート ・観察 ・振り返りの記述内容
終末 8分	5 学習を振り返る。 この單元では、評論の対比関係にある語や表現を整理し、構成図を作成するという活動を通して、対比関係を読み取る力と筆者の主張を読み取って言葉で表現する力が付いたと思います。また、みんなと交流することで、自分の考えを確かめられたり新たに気づけたりすることができました。今回学習したことは、これから文章を書いたり読んだりするときや、日常生活の中で自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを自分が受け取ったりするときにも使えると思うので役立てたいです。 6 次時の見通しをもつ。	【まとめ】対比の関係を見出すことで、筆者の主張を読み取ることに役立てることができる。

(2) 授業実践後の捉え

ア 「主体的な学びの実現」に係る振り返り・記述から

「主体的な学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表6】に示す。

【表6】 「主体的な学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「主体的な学びの実現」に向けて		
「答申」の記述	<p>○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう, 学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること</p> <p>○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう, 実社会や実生活との関わり重視した学習課題として, 子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること</p>	
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・課題遂行のために必要な「力」を洗い出し, それによる学習プランの作成 ・「学習シート」の活用による「見通しと振り返り」活動の充実 ・生徒たちにとって身近な話題として, 日本文化であるマンガが生まれた社会背景について述べられた評論の学習材化 	
振り返り及び観察の記述	生徒の振り返り	参観者の観察
	<ul style="list-style-type: none"> ・よく知っているアニメを取り上げていたので, 対比の例がすんなり頭に入ってきた ・内容は分かっているけど, なるほどな, と新しく思うところがあったので, 深く考えると色々なことが出てくるのだなと思いました。 ・生徒が好きそうな話題を取り上げることで, 集中力を高めることができたのでよかった。 ・説明を聞いて, これから「対比」を意識しながら読み進めるのだということが分かった。 ・最初は難しいことをやるのかと思ったけれど, やり方を教えてもらおうと, しっかり取り組むことができてよかった。 ・例を示されて, 自分で本文を読み込み「対比」できるところを意識して読みたいと思いました。 ・「対比」を見つけることで, 筆者が何を伝えたかがわかるということを知ることができた。 ・ワークシートには, この時間で取り組むべきことが順に並んであったし, 考えるべきことが分かるように図も見やすかったので, 何をすればよいか分かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入に, 生徒たちにとって身近な題材を取り上げ, 評論教材を読むことへの抵抗感を軽減しようとしたり, 生徒たちに思考させやすくしたりするなどの工夫が見られた。 ・第1時に, 単元のゴールの姿を提示することは, 生徒たちに見通しをもたせるのに有効な手段であると感じた。 ・第1時に, 国語を学ぶことの意味や「付けたい力」を明示したことで, 生徒たちは単元を通して学ぶべき事の理解や把握がなされ, 振り返りの時間に「何の力が身に付いているか」を意識するようになるのだと感じた。毎時間の授業時の最初に「本時の目標」を示すことと最後に「振り返り」をさせる場面を設置することが必要だと思った。

イ 「対話的な学びの実現」に係る振り返り・記述から

「対話的な学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表7】に示す。

【表7】「対話的な学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「対話的な学びの実現」に向けて		
「答申」の記述	○互いの知見や考えを広げたり, 深めたり, 高めたりする言語活動を行う学習場 面を計画的に設ける。	
実践内容	・構成図の作成と筆者の主張をまとめる際のグループ、全体での交流	
振り返り及び 観察の記述	生徒の振り返り	参観者の観察
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分では少し分からなかったところもあつたけれど, 同じグループの人の意見を聞いて, 理解を深めることができました。 ・考えを共有し, まとめるのは難しかった。いかに自分の意見を主張して, 相手の意見を取り入れるかが大切だと思った。 ・グループの中で, 教えてもらうことが多かったので, 今度は自分が教えてあげられるようにしたい。 ・グループワークをすることで, バラバラの意見を一つにまとめることができ, グループワークの重要性がよく分かりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ交流や全体交流の機会を授業の中に設けることはしてきたが, 今回の実践の中で, 普段よりも生徒たちが活発に議論している姿があり, 交流の目的やねらいなどを生徒たちが明確につかんでいることが大切であることを感じた。 ・教える側の生徒たちが意見を言いながらも, 皆に意見を求めるなど, お互いを思いやり, 学び合う姿勢が見られた。

ウ 「深い学びの実現」に係る振り返り・記述から

「深い学びの実現」に向けての手立てと授業実践後の「生徒の振り返り」, 「参観者の観察」を【表8】に示す。

【表8】「深い学びの実現」に向けての手立てと振り返り及び観察の記述

「深い学びの実現」に向けて	
「答申」の記述	○言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けること ○子供自身が自分の思考の過程をたどり, 理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・補助教材の内容や構成を言葉で理解し, 理解したことを構成図に表したり, 読み取った筆者の主張について記述したりして, 自分の思いや考えを広げ深める単元課題の設定 ・教科書教材を主教材として学習を進め, 補助教材での学びの過程をたどり, 不十分な理解が確かな理解へと深まっていく単元構成及び単位時間の設定

	生徒の振り返り	参観者の観察
振り返り及び 観察の記述	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対比することによって、何を主張したいのか、また、何を読者に伝えたいのかが読み取りやすくなるのだなと思いました。これから現代文の授業をする中で、対比表現を見つけたときは、今回の授業で学んだことを手本として筆者の主張を読み取っていきたいです。また、自分が文章を書く機会があったら、これからは対比などの表現技法を活用して文を書きたいなと思いました。 ・ 対比に着目して、筆者の主張を読み取ること、その作品をもっと楽しく読んだり、考えることができると思いました。自分の考えを持つことは国語の中で大切なことだと思いました。 ・ 人に自分の思いを伝えるとき、何かと何かを対比させながら伝えることにより、相手に伝わりやすくなることが分かりました。 ・ 対比から文章の構成を読み、そこから筆者の主張を読み取ることについて理解できたのでよかった。 ・ 授業を通して、文章中に対比がどのように配置されているのかが分かり、対比を使えば自分の気持ちをうまく伝えられることが分かった。これから日常生活の中でも、対比を使って自分の気持ちなどを伝えられるようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループでの交流の進行で、学力の高い生徒が主導するのは当然のことと思われるが、国語の力は全員がつけるものであり、偏りがないう司会や記録等の役割を明示する必要があったと感じた。

(3) 理論実現のための留意点

ア 「主体的な学びの実現」に向けて

単元の最初に教科書の本教材に入る前の導入として行った、学びの方法（方法知）を実感できるような活動を通じて、生徒たちは学習の見通しを意識し、学ぶことへの興味や関心を高めていったことがわかる。「やってみたい。」「自分にもできそう。」と思わせる導入の手立てが課題解決的な言語活動を進める上で、重要なポイントと考えられる。

また、実社会や実生活の中から、子供たちの学ぶ意欲が高まるような学習材を見つけていくことが大切であり、その中で用いる学習プリントは、有効であるものの、その内容、提示時期、活用方法等についてさらに実践を踏まえながら、研究を進める必要がある。

イ 「対話的な学びの実現」に向けて

グループワークによる学習活動は、生徒の意欲面に対しても、また、互いの知見を広げたり高めたりすることに対しても有効だったと言える。

最近、高等学校の授業でも「対話的な学びの実現」に向けて対話的な言語活動を行う場面が増え

ている。「主体的な学び」と同様に、「子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習」となるよう、学習場面を計画的に設けながら、ペアワークを積極的に取り入れて対話ができる環境を整えることやグループワークをするにふさわしい課題を提示することなども「対話的な学びの実現」に向けての大事なポイントであると考え。

ウ 「深い学びの実現」に向けて

評論教材について、内容や構成を言葉で理解し、理解したことをもとに自分の言葉で表現するという課題を行っていくことで、自分の思いや考えを広げ深める姿が見られた。また、「主体的な学び」の実現にも通ずることだが、補助教材での思考過程を本教材でたどってみることで方法知と内容知に対する自覚がより深められることが実感できた。

エ 「見方・考え方」を軸とした単元構想に向けて

単元で働く「見方・考え方」を構造的に捉え（【資料2】）、それに基づいた単元の指導を展開することにより、付きたい力を指導者が意識するとともに、学習者も付いた力を実感できる学びを提示することができた。

【資料2】単元で働く「見方・考え方」の構造

(場・対象)	・ 評論の表現・内容に対する
(学びに向かう力、人間性等)	・ 自分や他の人の考えを広げたり、深めたりするため、
(知識・技能)	・ 比較文化論の目的、特徴に着目し、論理の展開（対比） を図式化することで評論の要旨や筆者の主張を捉え、
(思考力・判断力・表現力等)	・ 捉えたことについて、自分の考えをもち、言葉で表現 すること。

オ 学習評価の充実に向けて

高等学校では、観点別評価の導入が来年度から本格化するが、目標に準拠した評価を着実に実施するためには、国語科の目標だけでなく、各校の学校教育目標を念頭に置き、領域や内容項目レベルの学習指導のねらいが明確になっている必要があり、また、学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたというのは、どのような状態になっているかが具体的に想定されている必要がある。このような生徒の学習状況を具体的に示したものが「評価規準」であると捉えて、評価規準を設定していくことが大切である。

本実践のように、要旨の記述によるパフォーマンス評価を行う際には、具体的にどのような記述があれば「おおむね満足できる」であるのか、それに加えて具体的にどのような記述があれば「十分満足できる」と言えるのかを指導者が明確にもっておく必要がある。「生徒の学習成果を捉える評価」に留まらず、「生徒を伸ばす評価」にしていくことが大切である。「評価」は、学習活動や教師の指導などを通じて学力が生徒自身に定着したか否かを見取るものである。したがって、指導前の生徒の持っていた能力が指導後にどれくらい「変容（定着）」したかを見取ることを意識して単元構想を立てることが重要である。そのためにも、単元の学習後の生徒の「ゴール像（国語力を身につけた姿）」を明確にしておかなくてはならない。

さらに、生徒自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうために自己評価を活用したい。その際、「学びの方法（方法知）」と「学びの内容（内容知）」を自覚した内容の自己評価を施すことが望ましい。一方で、自己評価は、生徒自身の学びの自覚のみではなく、指導者の振り返りにも生かすものである。「評価」は生徒に対する側面と指導者自身に対する側面とが一体となっているものであり、「授業改善に生かす評価」として捉えておきたい。

Ⅷ 研究のまとめ

本研究は2年研究であり、1年目の本年度は研究理論の構築を目的として取り組んだ。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善はどうあれば良いのかについて、今年度は授業実践との往還を通して、「答申」に基づいた理論化を図った。その結果、各教科で来年度の本格実践および検証に向けての理論を構築し、単元の指導案などのモデルを示す事ができた。

この理論化のプロセスで得られた教科レベルでの成果や課題点を下記に示す。

1 成果

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善について

今年度は2年次研究の1年目であり、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善に関し、「答申」（2016）に述べられたような、「教育の質の改善のための取組が、狭い意味での授業の方法や技術の改善に終始するのではないか（P.49）」、「工夫や改善が、ともすると本来の目的を見失い、特定の学習や指導の『型』に拘泥する事態を招きかねないのではないか（P.49）」との懸念があることを踏まえ、指導法を一定の型にはめ、狭い意味での授業方法や授業技術の改善に終始することのないよう留意しながら、「三つの柱」を総合的に育むことを目指し、「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた授業づくりの理論を提案した。

授業後に実施したアンケート等の結果から認められる成果は、次の5点である。

- ・「三つの柱」を総合的に育むことを目指し、「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた授業づくりの理論をまとめるとともに、その理論に基づいた学習指導案（授業実践）を提案することができた。
- ・「主体的な学び」の実現に向け、一次の重要性が確認できた。表現モデルの演示や、教師による解説が生徒の興味や関心を高めることに有効であることが確認できた。
- ・「対話的な学び」の実現に向け、ペアやグループでの交流が、生徒の学習に対する意欲を高めたり、互いの知見を広めたり深めたりすることに有効であることが確認できた。生徒たちが目的や必要性を意識して取り組む対話とするため、生徒たちに対話の相手や時間など何らかの「選択・判断」をさせることが一つの有効な方法であることが確認できた。
- ・「深い学び」の実現に向け、単元で働く「見方・考え方」を構造的に捉え、それに基づいた単元の指導を展開することの重要性が確認できた。また、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深めていくには、共通教材での学習により単元における学びの過程を把握した後、その学びの過程を別教材でたどっていく学習活動が文章の構成や展開の理解を促すとともに、生徒の学習に対する意欲を高めることに有効であることが確認できた。
- ・生徒が身に付けるべき資質・能力の定着を目指した単元構想や授業づくりについて、中学校と高等学校とで体系的に進めて行くことの有用性が確認できた。

(2) 学習評価の充実について

- ・「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を評価の観点とし、学習成果を的確に捉えるための評価規準の考え方を示すとともに、その一例を示すことができた。
- ・子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるよう、自己評価を学習活動の一つとして位置付けるとともに、自己評価を含んだ学習シートの一例を示すことができた。
- ・「十分満足できる」状況と判断するための【Aの視点（例）】を設定することや、学習シートの中に「目指す姿」を記述することで、「学習者の学びの推進力」、「生徒を伸ばす評価」と

なることが確認できた。

- ・単元に課題解決的な言語活動を位置付け、パフォーマンス評価を行っていくことで、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価の在り方の一例を示すことができた。
- ・学習活動や教師の指導などを通じて学力が生徒自身に定着したか否かを見取るため、指導前の生徒の持っていた能力が指導後にどれくらい「変容（定着）」したかを見取ることを意識した単元構想の在り方を示すことができた。

2 課題

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善について

- ・すべての生徒に国語科の求める資質・能力が身に付いたということを把握するためにも、できるだけ客観的な裏付けを得られるよう、授業実践の機会を増やす。
- ・カリキュラム・マネジメントの視点から、学校全体として育成を目指す資質・能力と「見方・考え方」を明確にして、広く学年や科目にわたった年間指導計画の作成のもと、充実した単元構想と授業実践を重ねる。
- ・単元の学習課題と本時の学習課題をどのように設定すれば良いのか、また、どのような内容にすれば良いのかについて研究する。
- ・実社会や実生活の中から、生徒の学習意欲が高まるような学習材を精選する。

(2) 学習評価の充実について

- ・確かな国語の能力が身に付いたかどうかを客観的に把握できる評価問題の作成や評価の在り方について研究すること。
- ・生徒の実態を的確に把握した上で、評価規準が生徒の学習状況を具体的に想定されたものとなるよう研究すること。
- ・適切に評価ができるような、生徒のゴール像（単元の目標に設定した身に付けて欲しい国語力が、授業を終えた後で生徒に身に付いている）を見通した単元構想や授業構想の在り方について検討を重ねること。

3 来年度に向けて

完成年度である来年度は、今回構築した理論および単元の指導案等に則った実践に入る。来年度は研究協力校および研究協力員、研究担当者による単元レベルでの実践を予定しており、その中で得られた知見の整理とデータの分析・検証を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通しての資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方について、報告書並びにガイドブック等を通して広く普及していく予定である。

〈おわりに〉

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました学校の先生方、生徒のみなさんに心から感謝申し上げます。

IX 引用文献及び参考文献

【引用文献】

中央教育審議会教育課程企画特別部会国語ワーキンググループ（2016），『国語ワーキンググループにおける審議のとりまとめ』資料4

中央教育審議会教育課程企画特別部会（2016），『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』P.28，PP.49-52，PP.60-63，PP.124-126，PP.130-131

文部科学省（2008），『中学校学習指導要領解説 国語編』P.7

【参考文献】

秋田喜代美（2016），『対話的な子どもを育み協働的に学ぶ力をつけるということ』（教育科学国語教育10月号），明治図書

岩手県立総合教育センター 教科領域教育担当（2016），『学習指導要領を具体化する小・中・高等学校国語科の指導法に関する研究—学びの連続性を考慮し，言語活動の充実を図る授業づくり—研究報告書』

高木展郎（2016），『学習プロセスを考えた国語科の授業づくりとは』（教育科学国語教育9月号），明治図書

中央教育審議会教育課程企画特別部会（2015），『教育課程企画特別部会 論点整理』

中央教育審議会教育課程企画特別部会（2016），『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』

中村和宏（2015），『コンピテンシー・ベースの新しい国語科授業づくりに向けて』（教育科学国語教育10月号～2016年3月号），明治図書

中村和宏（2016），『国語科授業におけるアクティブ・ラーニングとは』（教育科学国語教育5月号），明治図書

中村和宏（2016），『国語科において育成を目指す資質・能力と学習活動とは』（教育科学国語教育11月号），明治図書

中渕正堯・国語論究の会（2014），『高校国語実践の省察と展望』（三省堂）

松下佳代（2016），『国語科授業におけるアクティブ・ラーニングとは』（教育科学国語教育5月号），明治図書

溝上慎一（2016），『主体的・協働的に学ぶ力を育てる学習課題とは』（教育科学国語教育7月号），明治図書

【研究協力校】

岩手県立岩泉高等学校

奥州市立水沢南中学校